

昭和二十四年七月二十三日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第三三七号）

慈光

第二十九卷

第七号

目

次

清水誓一君の最後……………	近角常観……………	(1)
常音先生御法話……………	大字三右エ門……………	(6)
人生随想……………	柳瀬留治……………	(10)
私の記録……………	高千穂徹乗……………	(14)
念仏詩抄……………	木村無相……………	(16)
心に刻まれたこと……………	花田正夫……………	(19)

清水誓一君の最後

近 角 常 観

清水誓一君は清水石松氏の養子で実の甥である。温厚恭謙にして真面目で忠実な、実に立派な青年であった。私は信仰上の交わりとして君との関係を述べて、特に美しい君が最後の信念を君に代って告白しようと思う。

さて私が君と識り会ったのは今から五年前のことである。石松氏は学生を育てることを好まれて、常に大学や高等学校の学生約二十名に資金を与え、更に衣服、居住をすっかり引受けて世話せられたのである。氏の学生を愛されることは篤志とか感服とかいう様な程度でなく、むしろ不思議とか、奇蹟とでも言わねばならぬ次第である。沢山の学生と難然居住して恰々（とうとう）として楽しむ有様は、氏が所謂衆生縁の深いのに驚く外はない。

氏はまた信心に熱心で、煩劇な蜆殻町にあって、常に開法と称名は絶え間がない。氏が人の世話をせられるのも勿論この信仰と深い関係があった。そこでこれ等の同居の学生に向って、毎夕勤行の時、せめて御文だけなりとも聴聞

してくれといつも氏が頼まれた。そこで此等の学生に聞かせたいために、氏及びその一家は勿論、知人や近隣の人を集めて一月に一度法話を開かれた。そして私が其請に応じて参る様になったのがそもそも御縁の始めである。

氏が下谷初音町の岡倉邸に寓して学生と共に同居せられたとき私は初めて参ったが、誓一君は最も熱心なその時の聴者であった。講話の後に必ず深く質問したり、対話するのが例であった。それから久しく求道学舎へも熱心に来聴せられた。君が求道の苦心は実に察すべきものがあった。真面目な気風の青年諸君によく見ることであるが、真剣な態度では非信仰を得たいと求めて、あせるので不安で、あせればあせるほど、得られぬのである。いつでも、不審で、合点がゆかぬという態度で、しかも真面目に恭謙に質問せられたことを思い起こすとき、当時君が苦心の程も今更の如く同情に堪えぬものがある。

その後、君が大崎に住せられたので距離が遠くなって学

舎へは来られなだったが、村松町の石松氏宅の講話には必ず出席せられた。如何なる時も君を見ないことはなかった。しかし何となく勢なく見えたのは、今から思えば病気のせいであつたのであろうが、所謂蔭が薄かった。

君は実に道を求め、道を求めてしかも得られぬので困られた。自ら求めて得るのでない、如來廻向である。如來より与えられるのである、と云えば、それでは一体どうするのですか、と言われるのである。わが読者の中にはこの種の方が少なからぬのを覚知している私は、少なからぬ同情に堪えられない。あまり求めても得られぬので、遂に疲れた気味であつた、失望、絶望という歎きにおちたのである。然しそうとも言わず、いつも真面目な態度で一点の余裕もなく聴聞せられたのである。私は君が病氣とも知らず、こういう状態のままで最近まですごしたのである。

一日、奥様が来られて誓一君の病篤きことを語られたときは、如何にも寝耳に水であつた。その後石松氏宅で静養せられるようになったが、求道に疲れた君は病の進んでいるのにもかかわらず、一向開法の希望が出ぬらしい。然し石松氏や奥様は聞かしたくて致方がなかった。そこで石松氏は誓一君に向って言われるには「我家は代々真宗信者として後生の一大事が何より大切である。万が一にもおまえを仏壇から地獄へ落とすようなことがあつては、親や先祖

に向って申し訳ないことになるが、おまえは安心が出来ているか」と尋ねられた。すると誓一君は深く感して是非一度私に來て貰いたい、聞きたいとの事であつた。そこで早速その夜、直ちに私は病床に君を見舞うたのである。真面目な君は、痩せおとろえた身体をもたげて会釈するのである。私はこれを制して枕頭に近づけば、君は今までの求道苦心の跡を述べて、近來病が進んだこと、身体が勝れぬことを語り、それはそれとしておいて、と言華を切つて、石松氏の仏壇から地獄へ落としてはならぬと云われたことに深く感じて、病床をも顧みずお出でを願つたと言われた。

そこで私が申すには、それは、それとして、置いて、ではない、病が重ければ必ずあなたも色々心配であろう。人間というものは、重い病氣となるときは、親の力でも、妻子の力でも致方なく、その心淋しい胸の中を、たれ、一人察してくれるものはなく、こちらよりこの胸の中を聞くことも出来ぬ。また人間は死ということを考えるとお先は眞の闇で、実に時間も空間も考えることが出来ぬ。かく淋しき胸の中、行く先の眞の闇を深く察して、飽くまであわれみ、必ず必ず助けねばならぬという大慈大悲の御親心である。

今日まで喜びたい、信仰を得たい、安心したい、助かりたいという様子のみにあせって居られたのであろう。そしてどうしても喜ばれぬ、信仰が得られぬ、安心が出来ぬ、助

からぬ、であろう。そのたすからぬ者が可愛想じや、喜ばれぬ者が憐れじや、それを見捨てぬのじや、深く察するぞ、飽くまで助けおおせねばならぬという、やるせない弘誓の御力である。と申しました。

すると忽ち、ああ有難い、ああ有難い。方角を間違えて居りました。喜ばれぬのを可愛想じやというて下さるのを喜ぼう、喜ぼうとあせてばかり居りました。アア喜ばれぬを憐れんで下さる！アア方角を間違えて居りました。わかりました。有難うございました、と申されました。

これが歎異抄の第九章でありますよ、天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばれぬのは煩惱の所為である。その煩惱のために喜ばれぬを、仏がかねてしめして、喜ばれぬ者を、と仰せられたのである。又いそぎ浄土へまいりたき心なくて、いささか所労のこともあれば死なんずるやらんと心細くおぼゆるのも、かねて煩惱興盛なことをしるしめして、いそぎまいりたき心のなき者を、ことに、憐れみたまうのであると申した。

すると、長々方角を間違えて居りましたと繰返された。汽車の橋を通過して枕木の間から滔々と流れる水を臨むときは、誰でも目も廻らんばかり身慄いして恐ろしいのは当然である。その恐ろしいのが可愛想と思召して、決して落とさぬぞと襟元を捕えて下さるのがお慈悲の手である。恐

と申したところが、涙をうかべてよくよくの御因縁でありました……。と心の底からよろこばれた。噫五年の長い間、今日あるためなりしか、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

本月二日、第三求道会のととき、危篤の病人が車に乗りて参詣したいというのである、それなればというので帰路に立寄った。するとその嬉しげなる様子と、いかにも晴れればれた信樂とは周囲の者まで気が晴れるくらいである。とても瀕死の病人とは思えぬ、いかにもよろこびがあふれ、気が楽々となるであろうと思うて居りましたが、はたしてその通りになりました。イツ如何になろうと少しも心配はありませんと申された。

如何にも晴々した様子が、文類正信偈の御文の「必ず無上淨信の暁にいたりぬれば、三有生死の雲晴れて、清淨無碍の光耀ほがらかに、一如法界の真身あらわる」とあるのがこのことであると想起させられた。

数日経て、深夜に講話の帰路に立寄って、先日の喜びについて、正信偈の今のところを話した。すると此度はまた反対に「イヤイヤ中々駄目であります。先日一つ鍋の飯を食うた人が階下に居って話声がするから、帰りに立寄ってくれるかと思うておりました。ところがそのまま帰って仕舞いました。そこで一寸見舞ってくれないとよさそうなの

ろしいは恐ろしいが、かくまでたしかな御手であるから、行く先も何が何やら分からぬけれども、その闇も苦勞も氣にならぬ。念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり、たとい法然聖人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候、と仰せられたは、ここである。

かく喜ばれぬものを憐れみ、助からぬものを助けねばならぬの仰せなれば、喜ばれぬにて往生は一定である。いそぎまいりたきころのなきにつけて往生は決定でありますと私も誓一君と共に深く頂かして貰いました。

誓一君も、喜ばれぬが苦になりませぬ、何時、如何ようの事があっても心配はありませんと、南無阿弥陀仏と、手放しの安心があらわれて下さった。ひとり立ちの自督（じとく）があらわれて下さった。

御尊父が、仏檀から地獄へ落としてはならぬと云われたのが即ち仏様の御思召である、本願のお呼声のままである。今度このようにいただかれたのも全く如来様の深い御因縁である。私が数年前からお宅へ伺ったのも今日のことのためであった。噫、たまたま行信（ぎょうしん）を獲（え）ば遠く宿縁をよろこべ、中々一通りの因縁ではありませぬ。多生曠劫この世まで憐れみかむれるこの身なり、

のじやと不足に思いました。しばらくして思い出して見れば今日までに私がドレ程その人のために親切にしたか。その人が入学試験のために随分苦勞をしていた時も、すこしも同情しなかった、其人が入学した時も、すこしも共に喜んだことがないではないか。我身のことを善いもののように思うていたが皆駄目じや。私は罪ばかりじや、罪の深いのが眼に見えるようである。それをあわれんでお助け下さる仏様の御慈悲ばかりが有難い、有難い、と如何にも罪深いことを懺悔されるので、かくまで我が機を知らして下さるかと驚くばかりじや。我等は瀕死の人ほど眼のあたり悪さを感ずることが出来る、人は死が眼前にあらわる時ほど、透徹（とうてつ）した有様はない、実に我等は罪の塊りである、南無阿弥陀仏。

その時、私が若松求道会に立出する前であった。そこで親御が申されるには、先生は十五日朝でなければかえられぬのである。人間は何時かわからぬのであるから、万が一にもモウ一度承りたいというようなことがあっては残念じやが、モウ先生にお目にかかれぬともさらに不審がないままで安心出来たかとたずねられた。すると、もはや少しも承ることは御座いませぬ、さらに心配はありませんと、御慈悲ばかりが有難うございます、と申された。

それでは先生夜もおそくなりましたからと石松氏が申さ

れた。私も随分多くの人の臨終にお話をしたが、かほど遠慮なく、病人に申されたこともないが、またかくまでも明瞭な返答をせられた人はない。私は合掌してを別れをしたが、御縁があればまた遇いましょうと挨拶して階を下りるとき、頭をさしのべて私の後姿の見えぬ様になるまで涙をうかべて見守って居られた姿が、今なお髣髴として眼底に残っている。噫、実にこれが私の誓一君に対する今生の最後の別れであった。南無阿弥陀仏。

その後毎日々々石松氏やら奥様から歎異抄を読んで貰うて有難い有難いと非常に喜ばれた、特に第九章をよむと心から嬉しうであつたとの事である。他のところであると黙して聞いては居るが、多少不機嫌であつた。読む所は第一章、第二章、第九章だけであつた、とくに第九章になると様子をかえて喜ばれたそうである。

不徳なる私を非常に慕われ、待つて居られた。十五日の朝になるともう一度お会い出来るが、とてもそれまでは駄目であろうと申された。御尊父が、何か尋ねたいことでもあるかと申されると、尋ねることはなにもないが、何遍でもお遇いしたいばかりじゃと云われた。

十四日朝、高声で三十遍ばかり念仏申されて、はや事切れであつた。アア今頃は浄土で待つて居て下さることであらう、南無阿弥陀仏。

近角常音先生御法話

在家の
報恩講

昭和二十六年十月三日、西源寺にての門徒総お取り越しの御法話。

報恩講中、いろいろのことにわたってお聴き取りいただきました。これで聖人の御恩徳の程を謝したてまつたのでありますが、次のことをよく聴いていただきたいと思うのであります。

それは廻向ということで、従来仏教のおしえというものは功德善根を施して、それで仏と成るという具合に言われているのであるが、真宗はそれをしない。それはこちらからいくら功德を積んでも、雑毒虚仮で何もならぬ故に。そうでしょう、吾々他人に親切をするとしても、これが親切のしっぱなしなればよろしいが、どうしても自分の利益のおもい、おれがした、おれがしたと、自分の思いがチツとも離れないのであります。禅宗の坊様とても一角さとった様であるけれども恐らく配給米が他人より少なければ、も

遺言として親御に申されるには、自分が死んだら、香奠はそっくり、求道会館の寄附金に上げて下さい、そしてその代りに皆様に雑誌を一冊づつさし上げて下さい。そして皆様が同じお慈悲を頂いて下さる様にして下さい。頼みます、頼みますと申された。親御だけでなしに、店の方二人まで呼んでそれを遺言された。かくまでも会館のために心配して下さい。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

且つ、誓一君の思召は、これらの御厚意の親しい方々にどうか同様にお慈悲を頂いてもraitたい、社会全体の人々にも是非これを頂いて貰いたいにあつた。この文章は私が書いたのではない、誓一君が私をして書かしめたのじや。何卒この文を読まれた方々は誓一君の深重なお心をいただいて下さい。書いている私は、会館でも、雑誌でも懈怠勝で申訳がありません。どうか奮発して誓一君の御遺志に酬(むく)いたいと思います。

ここに謹んで誓一君の親しき方々の厚き御志を悉くお受けいたしました。深く深く感謝いたします。どうか皆様も誓一君の思召の如く、この雑誌を熟読して下さい。誓一君と同じ信仰に入つて、同じ妙果を得て下さい。皆様がこの雑誌を手にして一遍の御称名をせられたならば、お浄土から見て居られる誓一君は、どんなにか満足せられるであらうか、南無阿弥陀仏。

大字三右エ門記

つとよこせと云い出さぬとも限らない。人間は心からまことになりきれものではないのであります。学校で修身を教え、立派になれとすすめる。先日も或人が、親孝行せよ親孝行せよといわれる。親が子供を可愛がる、それはよいけれども、子が思うようにならぬと困る自分のために子にならぬと困るの考えであつて、これだと何を云うているのやら変なことになってしまふのであります。

親鸞聖人は「真実のころろはありがたし」と仰せられましたが、こんなことをいう人は世界中に誰もいない、著しい仰言りようであるも、これは事実である。

屋の席で申しましたが、聖人は叡山で刻苦修行をなされた。その結果は、人間はどうしても本物になれない、真実に出来ぬと、聖人は絶対のまことを求めて、本当になれないと仰言つた。こんなことを云われたのは聖人お一人だけである「真実のころろざらになし」と。学校教育において、善くなれ、善くなれと教えるよりも、聖人の仰せら

れたように、出来ない、申訳けない、ということをお教える方が、どれだけためになるか知れないと思うのであります。聖人は叡山で善くなれなかったゆえに六角堂の参籠となつたのであります。その結果法然上人に面接せられて、仏の眞実のみが本当のものと知らされなすつたのである。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、唯念仏のみぞまことにしておわしますとこそ仰せはそうらしいか」そらごと、たわごとのほかない者を憐れんで捨て給わぬ念仏のお眞実を頂いて、このまこと一つと、一心におまことのおあとを慕うのである。諸々の難行難修自力のころをふりすて一心にたのみ申す。一心に、ただ一筋にたのみ奉るばかりとなるのであります。

戦時中、私は云うておりました、世の中の眞宗以外の教というものは、出来もせぬことを説いている、これはまことでないものばかりである。それにくらべると眞宗の信者はわれわれの虚仮をお憐れみ下さる仏のおまことを著るしく頂いて、何処までも仏のおともをいたす、何処までもついていくということは自分是不実なれども、その者を引張って下さる仏がまことゆえ、一心にたのみたてまつるばかりである。かく一心ゆえ、難行難修でない。こういう信念の人においてこそ本當の世の中のことが出るのでないか

と云っているのである。

もろもろの善根功德を仏にさしあげて、他宗は廻向をす、他の宗派は廻向をこちらからする。眞宗は、こちらがほんものでない故、こちらが廻向しても駄目である。眞宗は仏の御廻向をいただいて、仏のおまことをいただいて、それでやらせて貰うのである、眞宗は如来の廻向ばかりである。何処々々までもという言葉をを用いておりますが、実にその通り、言葉通りであります。

この仏さまのお慈悲を聞かせていただいて迷妄の人間が底抜けにならせて頂いて、明るみに出させていだいたのであります。しかしながら人間というものはよくよく仕様のないものであります。すこし歳月がたちますと、また変になってしまふのであります。これというのも自力の執心が強いからであります。

これについて親鸞聖人が蒲団をかぶって四日間寝てしまわれたことがあるのであります。ところが四日程たつて聖人は夢のさめたようになされて「何のことやある、何のことやある」と申されながら起き出されたのであります。これはどうしてかと申しますと、かつて聖人はお誓をたてなされて、一代の間に三部經を千遍読もうと祈願をおこしておられたのであります。然るにこれを十遍ぐらいでよしてしまわれたのである。壹千遍読むということはこれ

は大変なことで、むずかしいことであります。これを十遍でやめられましたのはどうしてかと申しますと、南無阿彌陀仏の六字の御名号をいただいて有難く思わせて頂いてい

る以上に、何故に千遍読むことがあろうか。これは要らざることであると思われて止されたのであるが、以前の自力執心が残って離れないで、お病中に三經のお言葉が次から次へと頭に浮んで来られたのであります。それで聖人はそれにお気づきになって、自力執心は恐ろしいと、「何のこ」とやある、何のことやあると」仰言りながら起き出でられたということでもあります。

このことは私などでもないものであります。われわれ人間というものは、この自力執心のおもいが実におそろしいのであります。私も一応は仏さまのお慈悲の有難いことをよるこばせていただいたのであります。その後日がつたにつれて、この執心が起つてまいりまして、善いことがしたい。御信心いただいているからにはもっとしっかりせねばならぬ、善人にならねばならぬと思うようになってあります。それがそうは思うのでありますが、思うだけでよいことは出来ず、しっかりしたことにもならぬのでして、こんなことでは駄目だ、よろしくないと思うにつけて、心の中がモヤモヤしてくるのであります。ここで大抵の人は、こんなことではいけない、もっとしっか

りした御信心をただかねばならぬと、信心のいただき直しを考えているものも多いのであります。

しかし、われわれという者は、お見捨てない仏さまの御眞実に頭が下つて、やくざ者とわからせていただいて、これではじめて有難うございます、となるのであります。何も御信心をいただいて立派になることでもなければ、えらくなることもないのであります。

御信心を頂いたあとでも私自身腹も立てます。それでは自分の信心は駄目だ、こんなことではいかぬとなるのであります。よくよく思わせていただいて見ますと、本来われわれというのは、やくざな者であります。故に、腹も立てますし、心も曇り勝ちであります。これは日常あり通してあります。それでありますから、われわれというものは、何時まで経つても駄目なもの、よくないものであります。が、われわれが駄目なものなればそれだけなおさら仏さまはお見捨てないと御親切に仰せ下さるのであります。こちらから功德を積んでどうかするということではないのであります。仏さまから下さる功德なのであります。差し上げるのではない、われわれは頂くばかりなのであります。

親鸞聖人は論註にヒントを得られて、われわれ人間よりの廻向ではなくして、如来さまの方からこちらに下さるの

であるということ、を聖人がはじめて云い出されたのであります。こちらは横を向く、仏さまはその者の正面へ廻って「お前」と仏さまの方から呼びかけて下さる、何処々までも如来さまの廻向なのであります。

おそらく、千年、万年、幾万年の後になって、この真宗の如来廻向ということ、を世界の人々が聞いてビックリするのではないかと、私一人そう思っているのです。

これに関連しますが、教行信証の行巻にあります曇鸞大師の説かせられた、他利、利他の深義ということ、これを親鸞聖人は深く味わわれたものと拝察されるのであります。

「他利・利他を論ずるに左右あり云々」

皆様は兄貴の存命中によくお聞き下されたことであろうと思いますが、聖人は他利とは仰せられなかったのです。御和讃にも、

「如来利他の信心に通入せんとねごうべし」

と仰せられてある如く、他を利する。利他でも他利でもいずれでも同じようなものと云えるのでありますけれども、他を利するのと、他に利せられるのと、仏様から云えば、仏様が他なる我々を利して下さる、同じようでもここはわかるのであります。衆生より云う時は、われわれが仏様を助けるのではない、仏様に助けていただくのであって

人生随想

日日是れ好日

大自然、しかも宇宙の運行そのものには暦日などないであろう。我々の世界にそれがあるので、事のけじめがつきさっぱりした気持にもなる。

もともと草木が芽ばえ、花の咲く季を春とし、その春の始めを年の始めとしたことが知られるのである。旧年の煤を払い、一つのしめくくりをつけ、年を迎えるということ、は、生活上意義があり嬉しいことである。

「日日是れ好日」の語がよく言われるのである。これは碧巖録の第六則に掲げられた雲門（中国広東省の雲門山に住して称とす）の語で、彼の垂語を雲門四世を嗣いだ僧雪ムチヨウ（今より約千年前の人）が編み、頌古、即ち詩を以てて奥意を示したのである。

もと雲門は道を求めて僧睦州の門を叩いた。刻下に言を求められたが吐かないため彼を門外に押出した。更に訪い来て門を叩き三度目に片脚を門内に入れ押出されまいと

他に助けられるのであります。仏力の広大なることを云いあらわすには、浄土真宗では、利他々と申すのであります。如来利他と申して、他利とは一言も申しませぬ。聖人は論註をもととされて、仏様がお助け下さるのであると申されたのであります。他利とは、仏様に助けて貰うのであるとなり、利他とは、仏様がお助け下さるのであるとの意味でありまして。即ちわれわれから云うて、われわれが仏様に助けて貰うのだ」と、自分の立場から云うているのでは、これではいつまでたっても助からぬではありませんか。

ここは仏さまが、お前をすくうとの直接のお話なのであります。本当の他なのであります。仏様が、お前も助ける、即ち他を利するのであります。私は仏様が、この私をお助け下さるのだとは、長年の間云えなかったのであります。ようやく本当の所が分かって頂けたのであります。

もう一度申してみますと、他に助けられるでは、そのように申しているのでは、こちらから仏様にもの申しているであって、それではちががあかぬのであります。他が助けて下さるのだ、仏さまがお助け下さるのだということ、こここのところがよくわかれば、私ももっと早く御信心がよくわからせて頂けたのであらうに思っております。

柳瀬留治

した。睦州は「さあ道（い）え、さあ道え」と刻下に言を求め門を閉めようとする。雲門は戸に脛（すね）を挟まれ痛さに堪えず、進退窮した刹那、道を悟った。

おそらく彼がそれまでの願いは、道を得て心の闇が晴れ一大転換して明るくなろうとし、大悟を得て仏性を得んがためであつたらう。

ところが刻下闇に迷っている己、行先も同様な一箇の己だ、それ以外に仏はない、と悟つたのであらう。それが解けた彼は闇即ち光であり、日日是好日ならざるなしである。その彼は雲門山において衆に對し、日日是好日、将来に光を求める要なし、刻下の日日是れ光りだと垂示したものと解される。

わが近角常観先生もそれに似たことを常に言われた。

「君は今、人生全く仕様がなく、自分の心が浅ましく、くら闇で困っているのではないか。今現在光りのないのが君である。仏が判つたら、信が開けたら、など将来へのみ

逃がっている。現在の君、それだけが君の全体なんだ。将来へ将来へと幻を追っかけて逃げる、それを迷いというのだからそれで曠劫より流転し、此のさき未来際に流転するのだ」と。現在刻下の己の一点に釘を刺されるのだった。睦州が門扉の間、雲門の進退を押えたそれと、常観先生が現在の己の一点を押えての言とが、共に相通う偉大な垂示だと思ふのである。

コマねずみ

私に宗教の目を開かせた友が三人いた。すでに皆死んだその一人、原田君という建築家が感銘深く言った。

「我々人間は籠の中で糸車を廻わしているコマ鼠みたいなものだ。いつも現在輪の頂点に立ち、前へ前へと車を踏み、立場を絶えず前進させていると思つてゐる。現在を立場の頂点と思ひ、懸命に前進させていると思つてゐる。ところが位置はちつとも変らない、ただ時が流れているだけである」

という意味だった。私も成程そうだと思つた。顧れば順境であれ逆境であれ、己のベストを尽して前向きに踏んでいる。よかれ悪しかれ力を挙げて踏んでいる。これが己れギリギリの頂点だと思ふのである。

これは生活経営上、前進さす意図で踏んでいるのであるが、これを移せば、我々の自我中心、自我の人生の頂点に

立つてすべてを自我的に見ている、それでもあると思う。

私共は何千何万の集りの中にある時も、自我意識が中心となつてゐる。「何だ随分いろんな人が多勢来ているなあ」と自己を中心とし、己れのレンズから他を眺めている。又会議などで、問題に対して意見を徴される折、人が意見をのべると、何だあんな事なら誰だって思つてゐる。偉そうに勿体つけて、など思う。自我中心に他を見るのである。議事などは客観的に万人に妥当せねばならぬのであるが人間は自我中心なためなかなかそうは行かない。多くは自我のレンズを通じて妥当だと思ふ意見だろう。もしすべての人の見る角度を取り入れるとしたら中心の置き所がなくぼやけたものにならう。資本家、労働者、為政者、庶民、善人、悪人、人道家、犯罪者、皆の言ひ分を認めたらどうなるであらう。中心どころでなく何れが是か、何れが非か決し難くなる。

私など学校で哲学をやっている頃、学は客観的、妥当性がなくては真理でないということから、同級生で、個性をなくしてと考え変になつてゐたのがあつた。自我を排除すると第二第三の自我が抬頭してくる。仏教でも天台などで我を否定するに、想に非ず、非想に非ざるに非ず、といったことを云う。自我の主観はラッキョウの皮同様に、剥く芯(しん)まで皮なのが人間であつて、これが芯だという

奴もやがて皮をつくる、それが我々なのである。

自我というものは根強いもので、とても己れ自身の力で滅却出来ないものたるが判る(自我は尊重すべきだと現代教育はそうした人間性を是認し、それで行く他ないとして)のことで、それはそれとして)自我は人間の始末におえぬもの、これが人間の争鬭や悩みや迷いや罪惡の根幹をなす。そこで、我を無明の根元とし、この自我から脱れる道、救済、悟りを説くのが仏教なのである。自我のラッキョウ、そうしたものの全体、その物が光りを被つて救われ、ラッキョウ性を気にせず、又誇ることもなく、光のみを尊しとする、即ち無我といい、大我という境に転じる。これ以外に生きる道がないのである。

幸福観と人生観

誰しも幸福にすごしたいと願ふことは同じだと思ふのである。だがその幸福観が最近是我々の時代と變つて来たようである。幸福観の基礎をなすものはその人の人生観であるが、それが非常に変つて来たのである。

物質的、経済的に豊かな生活、それに身体の健康ということ、これは今も昔も同じことであるが、それが著しく積極的になり合理化されてきたことである。身体が健康で社会に活動して物質に豊かな生活を打ちたててゐることを、多くの人が人生目的としているようである。

特に平和な社会となり、物質が豊かに生産され、食糧が存分に入り、体育が盛んになつて、青少年の地位が著しく進み、それによつて体力的ともいふべきたくましい意氣、それから湧いてくる欲求や衝動も可なり激しいようである。それに近代教育は自己を抑制統一して人格的活動にという事にやや欠けた感があり、自由に個性を伸ばすという傾向が強いのである。それが近頃青少年間で起つた事件にも通りがかり肩がふれたからと云つて、いきなりナイフで刺すといった事、学生がハイヤーの運転手を殺して車を奪つたなど、しばしば報じられてゐる。これは統一的判断の欠けた一種の衝動ともいえる行為で情緒の歪んでいることが見られる。これも学校教育として科学的な教材である生物学で培われた処の生物的人間観が下地となつた動物的行動で、さした目的もないのに直ぐさま体力的凶惡手段に出るといふ、生物的な人生観の産物と思ふのである。

自我の尊重、個性の伸長といった思想から、どんな個性どんな性格でも己れ自身から自然に芽ばえたものが尊いと考え、それが社会に通用すると考え、余りに己れに対し疑問を懷かず内省もしない結果と思う。そうした行動を社会が容れないで斥けると、けしからんと反撃する。反対にそれが許されないと欲求不満となりノイローゼを起す。

それらを社会の罪とし自らが責任を負わない傾向も強い

のである。そして欲求不満やノイローゼが科学的方法による臨床心理学や精神衛生によって、すべて解明し、治し得ると云っているのもやや科学にのぼせた感がある。

そうした科学的思想から、宗教などは弱者の泣き言が、自慰に過ぎないという風に思う向きが多いのである。このように自分に疑問を起さない所、それを動物的だと私はいうのである。一般の幸福というものは、或一つの欲求の遂げ得た一つのピークに立つた刹那感である。欲望の山は漕ぎ下らない事が文化を進まずんだともいうのである。真の人間文化は、進むのみを知って退くを忘れたり、健康のみを知って病を忘れたり、生きることに急で死を忘れている。これでは片手落ちだと思ふ。又健康の連続、楽しみの連続には幸福感がなく、楽はかえって苦により、幸福はかえって不幸によって知らされるものである。

真の幸福とは、かく社会に立つて闘争し克ち得た一刹那感といったものではなく、内的に己れを知り、足るを知つての善び、それだと私は思うのである。富にあっても心の満足しない人は貧者で不幸な人である。真の幸福は己れを知り、足ることを知る所から人にも感謝をもつ、その賜物として恵まれるものでもあるのだ。

私の記録

孤独の自覚

亀井勝一郎氏はいつも「老病の自覚」という言葉で求道者の姿を説明されたが、私達は病気になるって始めてよく自覚されることは、人間は孤独だということである。

痛みや苦しみは親兄弟といえども代ることはできない。真剣に看病している肉親でも、病人を前にして疲れて眠ることもある。病人は痼癪をおこなながらも自身の孤独をつくづく感じとり、ひとり自分を見つめるのである。或は死の壁につきあたって永遠の生命について思いめぐらすものである。医師を信頼してすべてをまかせる態度は宗教における帰依の心に通ずるものである。両手はなして仏の願力に全托し、その慈悲を領受するところに私の生活の方向転換が行なわれる。歩々これ道場であり、平常心これ道である。不離仏（ふりぶつ）であり、値遇仏（ちぐうぶつ）である。念仏と生活は一致する。

恵空講師語録

○ 帰仏、帰法の身たれば、仏像をその家の主として、その仏の家に我も住まわして頂いて給仕すと思うべし。わが家に仏をまつると思うべからず。

○ 師あるとき「如来誓願の業は能く智愚の毒を滅す」の文を引きて曰く。

毒の中には、智慧の毒と、愚痴の毒と二つあり。常に人の思うは、智慧はよきもの、愚痴はわるきもの、善は薬、悪は毒なりと。今聖人のお言葉に、悪業煩惱ばかりが毒でない、功德も智慧もみな毒じやと仰せられた。

わが命を殺す者を毒という、その毒に二色あり、甘き毒、苦き毒なり。智慧は甘き毒なり、愚は苦き毒なり。苦き毒でも法身の命を失う、甘き毒でも往生の命を失う。

○ 暴風にあいたる舟には、ともに居ても、さきに居ても、苦しさは同じことなり。

貧賤なるものは、富貴なるを見て心安かるべしと思ひてうらやみ、或は地位高くば、苦もあるまじと思えども、一切衆生いずれも苦のなき者はなきなり。

高千穂 徹 乗

致命的な声の消失

私は三月末に退院し、その後約二十数回のレントゲンの照射を行っただけで、声を失ったけれどもからだは元気を恢復した。然しガンは切除しても早くて六ヶ月、おそくて三年の間に再発すればもうどうにもならない。病院と京町の自坊を往復する車中で、丁度桜が満開の熊本城を通りながら、余命いくばくと思えば、厳肅なところにくたれた。全く思いがけぬ大病によって死生の一関に参徹し、九死に一生を得たとはいえ、私にとって声を奪われたことは致命傷である。五十歳を転機として第二の人生が展開したが不具の身をもって動乱の世相の中に生き抜くことは容易なわざではない。少しの蓄えもない、貧しい学究の身にとって今後どれだけ自分と家族を養うてゆけるであろうか。

深く業苦を体感

前に述べたように私は十歳の春に父に別れてから、さま

さまざまな困難に耐えて今日まで一筋に学問の道を歩み続けてきた。過去五十年の間にいろいろな難関をきり抜けてきたが、今ここに不自由な廃人として残された。

しかし私は今日までの生活を省みて、そのすべてを私の受くべき業苦として、私自身がになわねばならぬものと信じている。私はこのたび大病によって深く自分の業苦を体験すると共に、私自身の上にふりそがれている仏さまの慈心を感じせしめられた。私は悲しくも一声の念仏さえ唱えることはできない身となったが、黙して静かに仏慈を仰ぐとき、いよいよ身近に仏のよび声を聞くことができるのである。ガンの再発は早ければ三ヶ月か半年以内ときいていたので、私は身辺の整理をすませて静かに最後の日の近づくの待った。

こう云えば簡単のようだが人間は一度は必ず死ぬものだということを承知していても、その死が近いところにあることを自覚しながら、一日一日の生活を満ち足りた心で楽しく生き抜くことは容易なわざではない。

過去を捨てて

五十才で私の第一の人生は終わった。私はすべての過去を捨てて第二の人生に出発した。

(一)掃除、(二)勸行の清規を守って、黙々として落葉を掃き雑草を抜き、黙々として仏前に経を唱えた。晴れた日は菜園の地を耕してイヌやニワトリやウサギを友としてたわむ

念 仏 詩 抄

い信心さま

親鸞聖人

ご和讃に

「煩惱にまなこさえられて

撰取の光明見ざれども

大悲ものうきことなくて

つねにわが身を照らすなり」

煩惱にまなこさえられて

撰取の光明見ざる身と

知らしめたもう

ご信心さま——

大悲ものうきことなくて

つねにこの身を護(まも)るぞと

知らしめたもう

れ、雨の日は先徳の書き残された書物をひらいて読みふけた。

かえりみれば、過去五十年の私の生活はすべて御恩のたまものである。私は天地のめぐみによって生かされ、同信の人たちの温情に浴して今日にいたった。このめぐみに浴し、このめぐみによって生かされた私は、さらに大きな仏の大慈悲心にやしなわれ、慈愛の手にまもられて生かされてゆくのである。

悔いのない余生を

私の余命いくばくもないことを思うにつけても、一日一日を最後と考えて悔いのない余生を過さねばならぬ。故郷を離れて三十年、私は今ここに療養の身となって帰ってきたが、今こそ荒れはてた郷里の心田を耕し、戦争のために身心を打ち砕かれた人たちと法味をわかち、法悦をともしなければならぬ。

よろずのことそらごとたわごとまことあることなきなりに、仏の慈悲の光がまことの光りであり力である。私はこのことひとつをあらわすために、残された生命を燃やしつくして浄土への道を歩み続けねばならぬ。私はこのように決意していのちの限り法輪を転じて親鸞聖人の教えを顕彰しようとたちあがった。

——昭和四十三、七月、西日本新聞掲載。——

(昭和四十九年、堤善継、書写)

木 村 無 相

ご信心さま——

ご信心さま

ご信心さま——

つねにこの身を照らしたもう

つねにこの身を護りたもう

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

まかせまいらせ

親鸞聖人 末灯鈔に

「ただ如来の誓願に

まかせまいらせたもう

べく候

とかくの御はからい
あるべからず候——
まかせまいらせたもう
べしと——

親鸞聖人・末灯鈔に
〃往生は

なにごとにもなにごとにも
凡夫のはからいある
べからず
如来の御誓にまかせ
まいらせたればこそ
他力にては候え——〃
まかせまいらせたもう
べしと——

親鸞聖人 末灯鈔に

〃往生の業には

私のはからいあるまじく
候うなり

ただ如来にまかせまいらせ

おわしますべく候〃
まかせまいらせたもう
べしと——

親鸞聖人 末灯鈔に
〃往生は

とかくも凡夫のはからう
べきことにも候わず
めでたき智者もはからう
べきことにも候わず
大小の聖人だにも
とかくもはからわで
ただ願力にまかせてこそ
おわしますことにて
候え——〃
まかせまいらせたもう
べしと——

まかせまいらせたもう

べしと

まかせまいらせたもう
べしと

ナムアミダブツ

心には

和上お歌に

〃心には

なにもなくして
いつまでも
法を聞くべき
身となりけり〃

心には

聞こえたものは
なにもなく
ただ聞きたやの
おもいだけなり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

まかせまいらせたもう
べしと——

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

しあわせ

和上お歌に

〃孫の齒が

生えかわるころ

爺々(じじ)の齒は

落ちて身にしむ

ナムアミダブツ〃

今日・明日(あす)の

老(おい)の身なれど

み名一つ

あればしあわせ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

心に刻まれたこと

花田正夫

さるべき業縁の催せば

昭和のはじめ頃、藤原義江氏のもとへ、主人を捨て、子供二人も捨てて藤原あきさんが走った。当時の新聞や雑誌は大見出しで報道し、あきさんを非難した。律法的な念仏者の其医師はその著書の中に、人非人、親でなしと酷評していた。

或日池山先生を訪ねると、その医師の書を出されて、

「成程藤原あきさんのやったことは重々善くないことであるが、念仏者としては、それをひとごととして責めるだけではすまされぬと思う。」

第一に、煩惱具足の点では我々も同様である。

第二に、仏の御心には老少善惡のへだてなく一人子として見て下さる。してみればお互はきょうだいである。

第三に、五逆の阿闍世も仏に救われて、我々の大先達に

なっているように、あきさんも何時か救われて先達となりうる可能性がある。

聖人は、さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべしと仰言っているが、我々も業縁次第で、どういう業、さらし、をするか分らぬ身である。あきさんよりも、もっとひどいことをするかも知れぬ。自分はそんな馬鹿なことは決してしないと云えない者だから……」

「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべし、という一句をわがごとく聞信する人は、人の惡業の中に自分も縁あれば同じことをする、その業因の煩惱を全部持ち合せている身であると知らされ、そのことを責めるのではなく共に悲しむ心がおこる。けれども仏でない身には、それを捨てず何処までもとかしてしまふ力はない。その不可能を可能化して下さるのは弥陀一仏である、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。」

と話して下さた。これをおきしながら、昔読んだ聖書の一筋に、マグナダラのマリヤの話を思い出した。

このマリヤは不義の罪によって、村の掟によって村はずれに連れ出され、皆の者から石を投げられ、棒で打たれていた。そこへ弟子と共に通りがかったキリストにマリヤが救いを求めた。

キリストは彼女に近づき、その周囲に線を引いて、大衆をそこから出させ、大衆に告げた。「汝等の内に心にやましきことなくしてこの女を打ち得る者は打て！」と。すると一人々々が自分の内心を反省し、次々と去って行った。

ようやくにして、キリストは「汝の罪は許されたり」とマリヤに告げると、彼女は感涙にむせんだのである。

更に思ったのは、身から出た錆とは云え、どうにもならぬ宿業のために、四方八方からきびしい非難を浴せられる藤原あきさんに、池山先生のこの心、否聖人の理解ある無限の涙がとどいたらどんなにか随喜することであろうかと。

善惡のさばぎでなく、罪を犯さずには生きて行けない身を知り尽くされて、それを何処々々までも悲憫して下さる大悲の涙のみが、唯一無二の救いの光となるのである。

○ 善人なをもて往生をとぐ況んや惡人をや

これは丹羽文雄氏が「親鸞と私」という題で講演した時の筆録を読んで深く感じたことである。概要は、丹羽氏は三重県の実宗高田派の寺院の長男に生れたが、母が四才の時寺を飛び出して愛欲の煩惱の中に身を崩した。それというのも母が、養子の父と祖母との不倫の仲を見つけてから生活が乱れはじめたのであった。そうした母を悲しみながらも母の情愛にひかれて丹羽氏はいつも母を訪ねていた。氏が大学を出てほどなく寺を脱して東京に出て作家の生活に入った。そして親鸞とも宗教とも縁が切れたと思つて自由になつて勝手に文学をしている積りでいた。当時亀井勝一郎氏が「丹羽の思想には救いがない」と評していた。母をとおして、人間はどうすることも出来ない惡を持つことを書き讀んでいた。ところが二十年ほど前にその亀井氏に「丹羽文雄は、本人はよく自覺していないが、仏教や親鸞を捨てたといっているけれど、結局親鸞の周囲をグルグル回っている」と云われて、孫吾空の物語のように自由勝手に飛びまわって、よく見たらお釈迦さんの大きな手のひらの中にいた、その「孫吾空ふり」を喝破（かっぱ）してくれた。本當にびっくりして親鸞聖人のものを改めて読みはじめ、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや惡人をや」の一句にふれた。今まで、せめて母が極く普通の生活をしていてくれたらと、悲しみ、責めていたが、責めるだけで

は落着けないで、やり場のない心でいたのに、その母の方が善人よりもさきに救われると知らされ、行きつまった心に光がさしてきた。それから文学に対する態度が一変してきた、と語っている。

これを読んで、底なしの愛欲の泥沼にあえぐ母を持った丹羽氏の悲しみ、しかもその母をどうすることも出来ない無力さから来る歎きを痛いまでに知らされると共に、人間の力の限界を越えた仏の大慈悲心を、よき人聖人から知らされて厚い壁が破られて光明がさし、心機が一転した氏の悦びが私の身にも伝わってきた。

○ 湿地の淤泥に蓮華を生ず

これは福島政雄先生が大経の五悪段の中第三の悪についてわが御身に掛けて次の様に話して下さった。

第三の悪は、主に男に対しての教誡であるが、どうもこの世の中によくない人間がある。始終心の中にみだらなことばかり考えている。そして出て入ってもみめ美しい女なんかに眼をつけて、ながし眼で見たりする。それから自分の妻をそっちのけにして、そっと女を他に囲うて居たりする。

めると同時に、すこしどうやら、その方面の気持が薄らいで、遠のきはじめたのである。もっとも人間のことであるから、それは開けはじめたと云っても矢張り死ぬるまでは、何かそこにあるということはまぬがれないのだけれども、とも角、その頃からすこし変ってきた。

悲化段（ひけだん）から五悪段にかけて、繰り返していただいで居ると、これは親がしみじみと子供に言いきかせて下さっている。それがフト私が子供の立場で、そう云って下さる親様の顔を見上げてみると、その親様の眼に一杯涙がたまっている、そこで段々と自分の浅ましい姿が見えて来るのである。

× × × × ×

大略、以上のようなことをねんごろに話して下さったことが感銘深く耳の底にのこっている。

私共は、重々悪いとわかっているのに、それを抑えようとする、なおその欲はひどくなってくる。食物の欲でもまた名譽欲でもみんなそのようで、おさえつけようとすればひどくなり、また苦心慘憺しておさえつけてしまったと思うととんでもない欲が飛び出してくるのが私共の実状である。

それかと云ってそのままではほっておけない。ゲエテの

この様に教えられて、釈尊は「お前はそういうみだらな心ばかりで、到底お前はよくなりようはない。それだから自分としてはそれが可哀相で可哀相でたまらぬ。何処々々までもお前のその姦らな心がけてしまうまでは、お前を見捨てられない、何処々々々までも自分の心をお前に注いで行く」と仰言っている。そうした涙を注いで下さっている」と知らされて見ると、愛欲煩惱のかたまりである私が段々とかされてくる。

○ ？ 実際問題として、私が四十三の夏、七月二十五日、高松で近角先生の御話をよく聞いていた弁護士酒見忠勢さんから、句仏上人の問題のお話を聞いた。

「句仏上人は墮落した方である。もっともお気の毒で、坊ちゃん育ちであつたものを、取りまきの人が、お酒を覚えさせ、女遊びを覚えさせるといふように段々誘惑して墮落させたのである。そしてあんな破目になったのである。ところで、その上人を飽くまでも近角先生は立てて、上人のために生命がけに全国を説き廻っておいでになる。あれは人間業とは思われない、仏様のお働きというものがこんなものかと思う」

と酒見さんが何気なく話された。これがピンと私の胸にひびいて来た。いやこれは句仏上人の問題じゃない、私の問題であると、その時気がついてきた。それから、自分が愛欲煩惱のかたまりのような者であるということに目が醒

言う「無力であるが不滅の願い」としてよくなりたいの心から、翼を失った小鳥が天空を慣れながら、いたずらに地上を走り廻るに似たあわれさである。

この無力であるが不滅の願いに呼応してあらわれて下さったのが弥陀仏の本願の船である。

生死の苦海ほとりなし ひさしく沈める我等をば

弥陀弘誓の船のみぞ のせて必ずわたしける

とも、また教行信証に、

ひそかにむもんみれば、難思の弘誓は難度海（なんどかい）を度する大船。無碍の光明は無明の闇を破する慧目なり。

と讃仰され、更に

しかれば、大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到りて、大般涅槃を証し、普賢（ふげん）の徳にしたがうなり。知るべし。と信証し随喜していられる。今は亡き内田卓二さんの

○ 自利 利他の 行 満足や 阿弥陀仏の喜びも思ひおこされる。

無明煩惱しげくして塵数の如く遍満す
愛憎違順することは高峯岳山に異らず

Sさんは主人が愛人のもとに走ったが、二人の子を憐んで女の細腕ながら子供をまもり続けた。そのうちに娘さんは病死し、男の子一人になった。そうした生活にあって歎異抄を読み、念仏を心の支えとしていられた。

或歳末に肺炎となり、それがもとで痼疾の肺結核が悪化し、いよいよ駄目となった。御主人からの電話で病床を見舞うと、酸素吸入でやっといのちを支えていられた。

「何かおきになりたいたいのことですが、御子さんのことでしようか」

と云うと、頭をふられて、

「子のことではありません。今では主人がいることが何よりです。唯今日まで私は、人様には笑顔をしておりましたが、心の中で主人を憎み、その愛人を怨い、鬼や蛇が一杯でした。こんな私でも本当に仏様はおすくい下さるでしょうか……」

と、かすれた声ながら、目をすえてたずねられた。早速「人間の約束はどんなにかたく結んでも、マツタが入ることがありますが、仏様の仰せには微塵もマツタがありません、間違ひなく救って下さいます……」

と、お答えすると、涙をうかべて、「ありがたいことです、く」と念仏に帰られたのでした。

又、今は亡き別府の麻生介医師の「信仰と疾病」の書にあ

自分は覚悟の上であるが、子供まで闇におとすことは出来ぬとなつて、篤信の医師の麻生先生をたずね、苦衷を打ちあけると、「よう訪ねてくれた、王舎城の悲劇の中でイダイケ夫人は道を積尊に聞き、新しい生活に入ったが、貴女もよう仏様の心を聞いておくれ」と諄々と、煩惱の身としてどうしようもない人生の業苦と、それをかねてしめして何処々々々までも大慈悲をそいで下さる仏様のおまことと告げられた。

そうした聞話を重ねて一応おしえはうなづけるようになったものの、今一つ不審がとけなかった。そこで「これほど有難い教をお聞きしても、本当によろこばせんが」と云われると、麻生先生が坐を改めて、「貴女は何をいうのです。主人の生活が乱れたといつて、死ぬの死なぬのと云っているのは貴女が迷っているからでしょう。その煩惱に狂うた心で、どうして大きなさとりを開かれた仏様の心を喜べようか。よろこぶ心さえない貴女をことに憐れんで下さるのです」ときびしく答えられた。

そこで「私がうぬぼれておりました、申しわけがありません、ありがとうございます」とはじめて心がひらけて御礼を云って帰ろうとされるので、麻生先生は早速「何処へ帰るのですか?」と、きかれると「姑や子供の居る家です」とのこと。

った実話であるが、折にふれて心に去来するものがある。農家に嫁して二人の子も出来た婦人があった。主人が、十年満州へ行かせてくれ、このままでは埋もれたままで生涯終らねばならぬから。あちらで一旗あげ財産もつくって帰ってくるから、子供と母と田畑をまもっていてくれ、と云って出掛けた。

夢の間に十年すぎて、沢山の金を持って帰ったけれど、あちらで満州妻を持っていて同伴して、街はずれに住ませるようになった。そこで十年間家をまもってきたのに、主人は勝手なことをしてと悲歎にくれた。姑さんは、非常に同情して「つらいだろうが子供も二人いることだから、いつか帰ってくるから辛棒しておくれ!」と涙で慰めてくれた。それで崩れる心を鞭打ちながら二年もすぎると、段々主人があつかましくなり、家には殆んど帰らなくなった。そうなると、姑さんは、老いの身の淋しさから「嫁のあんたのあしらいが悪いから」と主人に味方して責め始めた。ここに居たたまらなくなつて子供二人をつれて実家に帰ると、兄が「先方が出て行けというのであれば実家だから引きとるが、お前がつらいから出たのでは引き受けられぬ」と云うので、そこにも居られず、一層親子心中してしおうと決心して死に場所を探していると、子供が「死ぬのはいや」と逃げ廻るのを見て、さて死後はどうなるのか、

すると「姑さんは相愛あず責めますよ」と重ねてきくと「今まで人間に仏さまの親切を求めて、自分の心を省みたこともありませんでした。姑は淋しさのあまり私を責めたのです。主人もどうしようもない業苦を背負っています。私には仏様が何処々々々までもお見捨てのないおまこと一つで満足です」と念仏裡のこたえに麻生先生も安心して家に帰した。

その後、姑さんはきびしく責めたけれど、その度ごとに念仏が浮かび、今までのような反抗心が転化するようになり、姑さんも段々やわらいて行つた由であるが、その結果のよしあしはおいて、弥陀仏にまもられての信の旅こそ同慶にたえぬことである。

大略以上のことが述べてあつたが、和讃に

慈光はるかにかぶらしめ 光のいたるところには

法喜をうとぞのべたまう 大安慰を帰命せよ

とあるように、この大安慰者ましまさずば、愛欲葛藤(かつとう)の八方ふさがりの闇の中に悶死せねばならぬ身である。「信心を本とす」と仰言るのも、この大慈悲心が現にわが身にそそがれていることに気づかせて頂くことが、仏界に入り、浄土に生れさせて頂く根本であるとおすめである。

あとがき

最近東海地区に地震近しとしきりに報道される。大丈夫なと思いきっているこの大地があぶないと思われざるに心細い限りである。そこに色々のそなへは大切であるが、必ず来る自分の死、しかも今日とも明日とも知れぬのこれには平然としていて、生死を出すべき道に心が向かない愚かさをしみじみと知らされるこの頃であります。

近角常観先生の御講話は清水青年の上に顕現した信の輝きをねんごろにお教え頂き襟を正さしめられました。

八月は常音先生の御忌月とて、御郷里での報恩講の最後の日に、如來の御廻向をお教え下さった先生の御法話を大字さんの筆録からいただきました。

高千穂師の記録は、喉頭ガンで声帯を切除された五十歳の時の信味であります。

「罪障功德の体となる、障り多きに徳多し」と聖人は信響されましたが、その仰せのままを高千穂師の上に拝し、尊くありがたく頂きました。

木村無相さんは重病の方々の御見舞やら、求法の友との語らいに、一日一日を大切に過ぎていられます。「いざさらば雪見にころぶところまで」の旅姿です。

山鹿素行の四書の講義を読んだ時「四書を本当に読んでみると、その教が身について人格が姿る。そうでない読み方は読んだといえぬ」とあったのに驚いたことがあつた。聖人の言葉を讀むうえにも他山の石として心得ねばならぬと思つた。然し省みて

よき教に沢山ふれながら、それが身につけて生きた教となつたものはまことにすくなく、自分と教とが別々になつてゐるものが多いことは悲しいことである。

本月も老・病・死の問題を縁とした法味が多くなりましたが、現在の私には次から次へとそこに立たれた人々の消息が多く身につまされるにつけ、こうした編集になりました。六月三日にはよく聞法して下さった稲垣がねさんが亡くなられました。又山口県の長年の誌友の末永さんが肺ガンの中から

病める身も弥陀の誓いに生かされて、業苦の海に夕日かがやくの一首を送つて下さいました。ありがたいことです。

御紹介

「光りと闇」 神原徳草著、頒布代、五百円、送料百二十円。申込所、長崎市古川町七、是真会病院。本書に「たのもしき」の副題があります、五十一年五月に長崎市の閑息会の主催での神原師の講話の筆録であります。はじめに白隠禪師の求道の歷程と念仏、次に晩年に歎異抄九章を味読されてのお話になっております。

八月一杯休みます。

御案内

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜午后一時半。南区駈上町二の八八、花田宅

市バス、新郊通り一丁目下車。

地下鉄、新端橋終点下車。

名鉄、呼続下車

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午后昭和区小桜町二丁目四番地。

市バス、北山町、又は御器所通り下車。

定価 半年 七〇〇円 (送共)
一年 一四〇〇円 (送共)

名古屋市内南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫
電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人 坂部 光雄

名古屋市内南区駈上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号 四五七